

# 緑のゲオルギオス

## クロアチアとスロヴェニアの儀礼から

伊東一郎・早稲田大学文学部教授

論文「スラヴ民衆世界における聖ゲオルギウス イコン・儀礼・フォークロア」<sup>1)</sup>伊東一九九四<sup>2)</sup>を執筆した際に筆者が主に参照したのは、筆者の調査地であったブルガリアとロシアの資料であった。その際に南スラヴの聖ゲオルギオス祭の儀礼の中で、私自身の語学力と資料不足、研究不足のために簡単にしか触れることができなかったものに旧ユーゴスラヴィア西部・クロアチアとスロヴェニアに知られる農耕儀礼「緑のゲオルギオス」があった。

たまたまこの二〇〇三年八月にスロヴェニアの首都リュブリヤナで第十三回国際スラヴィスト会議が開催され、この町と隣接するクロアチアの首都ザグレブを訪れる機会があった。この時にはフィールド・ワークを行なう余裕も準備もなかったが、この機会にこの儀礼に関する資料で不足していたものを手に入れることができ、既に手元にあったものと合わせて読む機会を得た。

東西両教会で四月二三日あるいは二四日に祝われる聖ゲオル

ギオス祭はスラヴ諸国を含むヨーロッパ全域で春の農耕暦の始まりの日とみなされているが、それはクロアチアとスロヴェニアでも例外ではない。この地域では「ゲオルギオスの行進」(クロアチア語「*jurjevski ophod*」、スロヴェニア語「*jurjevanje*」)と呼ばれる門付けの儀礼が行なわれる。この儀礼はクロアチアでは主に西北部、スロヴェニアでは南部のベラ・クライナ、東北部のシュタイエルスカ、ケルンテン(コロシカ)の各地方に主に分布している。「緑のゲオルギオス」はこの「ゲオルギオスの行進」の別名でもある。南スラヴの民間暦においてきわめて重要なこの儀礼についての基本文献は、やはり、スロヴェニア、クロアチアを中心とした南スラヴ各国の研究者によって書かれたモノグラフということになる。

文献表に挙げたクロアチア民間暦の基本文献である「ミロヴァン・ガヴァッツィの『クロアチア民間暦』」<sup>3)</sup>「Gavazzi 1988」はもともと一九三九年に初版が出版されたものである。私は国立民族学博物館勤務時代の一九八一年に展示資料収集のためにザグ

レブを訪れる機会があり、その時九〇歳を越えていまだ豊饒かぐやとしていらしたガヴァッツィイ教授をザグレブ大学に訪ねたのだが、その頃はこの本は稀覯ヒョウコウ本となっていた。しかしバルカンの民間曆に私が関心を持っていることを知ったガヴァッツィイ教授は、その後ほぼ半世紀ぶり、一九八八年に出版された第二版をわざわざ私に送ってくださった。またクロアチアの儀礼「緑のゲオルギオス」についての基本的モノグラフであるフズヤクの『緑のユライ』[Huzjak 1957]を送ってくださったのは、ガヴァッツィイ教授の弟子でやはりこの時知り合ったザグレブ大学のヴィトミール・ペライイ教授であった。

文献表に挙げたスロヴェニア民間曆の基本文献であるニコ・クレトの『スロヴェニア民間曆』は、初版が一九六五年から一九七〇年にかけて出版されている。これは私の蔵書の中になかったものだが、今回リユブリヤナを訪れて、この著書の第二版[Kuret 198]が出版されていたのを知り、買い求めて目を通すことができたのである。

ブルガリアの民俗学者タチャナ・コレヴァのモノグラフ『南スラヴ人における聖ゲオルギオス祭』(一九八一)は、文字どおり南スラヴ人における聖ゲオルギオス祭の儀礼を詳細に分析したもので、前記の論文執筆の際私の主要な参考文献となったものである。この書物にも「緑のゲオルギオス」に関するまとまった記述が見られる[Koljeba 1981: 131-155]。しかし前記論文執筆の際に私が主たる関心を注いだのは聖ゲオルギオス祭に行なわれる牧畜儀礼だったのでこの記述にはあまり注意を払わな

かった。

ここではこれらの文献により、儀礼「緑のゲオルギオス」についてのごく簡単なあらましを改めて紹介し、上記論文の欠を補うこととしたい。

この儀礼は十八世紀初頭から記録されており、スロヴェニアでは一八三九年のヨハン・カベッレのドイツ語の文献に初めて言及されるといふ[Kuret 1988: 256]。

クロアチアとスロヴェニアに知られるこの儀礼にはいくつかのヴァリエーションがあり、その細部には多少の違いがある。しかしガヴァッツィイによれば、その意味は春の到来の通告、音による悪霊祓い、豊穡呪術という三つの機能に帰せられる。

この儀礼の基本は聖ゲオルギオス祭当日、あるいはその何日前に若者たち、あるいは若者と娘たちのグループが村を行進するというものである。

行進の男性の参加者はユラシ Juraj と呼ばれる。クロアチアでは参加者の数は二人、三人、五人、七人などの場合が多く、奇数に豊穡を保証する呪術の意味が付与される場合が多かった[Huzjak 1957: 9]。後には儀礼の参加者には学校の生徒やジプシーが目立つようになったという。ちなみに門付けの儀礼にジプシーが積極的に参加するのは、バルカン地方に一般的に見られる現象である。

行進の参加者の中から一人の若者を主人公として選び、これがクロアチアでは「聖ゲオルギオス」を意味するスヴェティ・ユライ Sveti Juraj、あるいは「緑のゲオルギオス」を意味する

Zeleni Juraj' Zeleni Jura' Zeleni Djuraj と呼ばれる。スロヴェニアでは Zeleni Jurij あるいは Vesnik と呼ばれた。後者はスロヴェニア語の方言で「春」を意味する vesna（ロシア語の「春」<sup>vesna</sup> と同根）に由来する。

この主人公に選ばれるのは行進の参加者の中の最年長の、一番の美男子とされている。しかし参加者の年齢には地域や時代によって八歳から二〇歳までのばらつきがあり、少年がその役を演じることも少なくなかった。ただそれ以上の年齢の者が参加することはタブーで、クロアチアではこのタブーが破られると、その夏に雹<sup>すな</sup>が降ると信じられた〔Huzjak 1957: 9〕

この「緑のゲオルギオス」は緑の枝や葉で菊人形のように覆われねばならない。彼は家々をまわる際に沈黙を守りスキップをしながら進んでいく。彼が高く跳べば跳ぶほど亜麻の背が高くなる、と信じられた。また逆に彼が行進の参加者全員と共に春の到来を告知し春の豊穡を予祝する儀礼歌を歌い、踊る場合もあった。儀礼が終わると家の主人に緑の枝が手渡されるが、それには豊穡を保証する呪術的効力があるとみなされたので、渡された枝は畑や庭、家畜小屋や作物の置き場の中に置かれた。行進の参加者は家ごとに食べ物をもらった。後には食べ物物の代わりに小銭が与えられるようになっていった。主人が何もくれない家にはあらゆる災難を予告するような誹<sup>そと</sup>り歌が歌われた。以前は儀礼の参加者は貰った食べ物で宴会を催す慣習だったが、後には貰った食べ物や小銭をお互いに分け合いそれぞれ家に持ち帰るようになっていった。

次にあげるのはクロアチア・トゥロポリエ地方のムラツリンで採録された典型的な「緑のゲオルギオス」の歌である。儀礼の参加者であるユラシたちは、各戸の前で「緑のゲオルギオス」の到来を歌い、贈り物を要求する。

Prešiel je, prešiel,

Pisani Vuzem;

Došel je, došel,

Juraj zeleni,

Iz zelene gore

U to ravno polje.

Darujte ga, darujte,

Jurja zelenogal

Dajte Juri mesa,

Da vam ne bedesa,

Dajte Juri soli,

Da vam Boga molli

Darujte ga, darujte,

Jurja zelenogal

Dajte Juri sira,

Da vam lepše svira,

Dajte Juri jajeci!

華やかな復活祭は

過ぎたぞ、過ぎ去った

緑のユライ(ゲオルギオス)が

やってきたぞ、やってきた

緑の山から

平原へ

やっておくんない

緑のユライに

ユライに肉をおくんない

馬鹿なことをしないように

ユライに塩をおくんない

神様に祈ってもらえようように

やっておくんない

緑のユライに

ユライにチーズをおくんない

うまく笛が吹けるように

ユライに卵をおくんない

【Gavazzi 1988 : 45-46】

ここでは復活祭が終わってから聖ゲオルギオス祭が来た、と歌われているが、実際には移動祭日たる復活祭は聖ゲオルギオス祭の後に来ることありうる。しかし民衆の時間感覚ではあくまでも聖ゲオルギオス祭は復活祭の直後に来るものである。このため聖ゲオルギオスのイメージは「復活」のイメージと密接に結びつくことになる。

緑の山から野に降りてくる「緑のユライ」は、農耕の開始を「う」じて告知するが、これは山からおりてきて「田の神」となる我が国の「山の神」を思わせる。この歌で「緑のユライ」が要求する肉、塩、チーズ、卵などはクロアチアの儀礼に典型的なものである。

またクロアチアの儀礼歌では次のように、「緑のゲオルギオス」は緑の馬にのってやってくる」とされる

Dobro jutro dobri gospodari!

Evo zelenog Djure

Na zelenom konju

Zelen ko travica

Rosan ko rosica.

Nosi žitni klas

I od Boga dobar glas.

おはよう、主人がた！

緑のデユラ(ゲオルギオス)が

緑の馬に乗ってやって来た

草のよつにあおあおと

露のよつにみすみすしく

麦の穂と

神のよき報せを持ってくる

【Huzjak 1957 : 22】

「緑のゲオルギオス」の儀礼歌のテクストは冬期に狼を儀礼的に駆逐するウチャールの儀礼歌に近いものとなることがあった。ここには牧畜の守護者・「狼の牧者」たる「緑のゲオルギオス」のイメージが混淆している【伊東 一九八一：七八六】

Dajte Juri slanine

Da vam tjera vuka s planine!

ユーリに豚の脂身やってくれ

山から狼を追っ払ってくれるように！

【Huzjak 1957: 17】

スロヴェニアの民俗学者ニコ・クレトによれば元来この儀礼はスロヴェニア全域に広まっていたが、十九世紀には既に廃れだした。その後地方在住の学校教師の影響によって復興したのだという。例えばラシコ（シュタイエルスカ）では第二次世界大戦前に再び見られるようになり、一九六〇年代まで行なわれていたという。

家の前で歌われるスロヴェニアの典型的な儀礼歌は次のようなものであり、クロアチアのものも多く共通点がある。

Prošal je, prošal pisani vuzam,

došal je, došal Zeleni Jurij,

donesel je, donesel pedenji dolgo travico,  
laket dolgo mladičo.

Dajte mu, dajte, šta premorajte!

Dajte mu soli, da bojo debeli voli,

dajte mu pogače, da vam noga odskace!

Dajte mu groš, da bo došal sveti Jurij još!

Šilo mi je v Metliki

dreta mi je v Ljubljani

Dok to saberem, cipele razderem,

Oj, oj, mila majka, bo li koj?

はなやかな復活祭が過ぎて  
緑のユリイがやってきた

指の高さの草の葉を

肘の長さの木の枝を持ってきた！

用意したものをユリイにやっつくれ

牛が肥えるように塩をやっつくれ

みなさんがびよんびよん歩けるようにパンをやっつくれ

ユリイがまた来れるように小銭をやっつくれ

私の錐はメトリカに

私の靴の紐はリュブリャナに

いただくものをみんな集めるまでに

靴は履き潰す！

ねえねえ、おかみさん

今度はぐいに行つたらしいの。

【Kuret 1998 : 257】

もしも家の主人が何もくれないと次のようなそしり歌が歌われる

Pred vratu je borovića

krepara vas polovića

Vaša vrata so iz blata,

v vaši hiši

sami miši,

vaši vrati

sami krtili

門のところに松の木が立つてるが

その松の木も倒れんばかり

あんたがたの門は

泥作り

あんたがたの家は

鼠だらけ

あんたがたの庭では

もぐらが耕す！

【Kuret 1998 : 259-60】

スロヴェニアでは「緑のゲオルギオス」はブナ、シラカバ、キツタ、マツあるいはモミの枝で頭から足の先まで覆われるかあるいは仮面のように大きな編み籠を頭からすっぽり被る。行進の際いわゆるメイ・ポールを持ち運び、行進と共に樹皮で作ったラツパなどを鳴らす。家の前では次のように歌われる

Zelenega Jurja vodimo,

Maslo in jajca prosimo,

Jezičabo zganjamo,

Mladolejfe trosimo!

緑のユーリイを連れて来たぞ

バターと卵をお願いします

魔女を追っ払ってあげますよ

春を呼び寄せてしんぜましょつ

【Kuret 1998 : 254】

ここで「魔女」と訳したイェジババとはチェコの民話にも登場する魔女で、ロシアのパーバ・ヤガーと同語源の神話的存在である。この歌では冬を擬人化した存在として登場している。行進が終わるとメイ・ポールは村の中心に据えられる。最後に娘たちはメイ・ポールや緑のゲオルギオスの仮装の飾りをすべて取り壊す。

ヘラ・クライナ地方では若者は「緑のゲオルギオス」を川に

引つ張つて行き、突き落とす。別の地域では仮面がわりの編み籠を水に捨てるか「緑のゲオルギオス」とメイ・ポールに水をかける〔Kuret 1998 : 256〕

この「水掛け」の要素はバルカンにおける降雨儀礼「ドドラ」あるいは「ペペルータ」を思わせる。この儀礼は日照りが続いたときなどに、子供を一人選んで木の枝で飾り、この子を先頭に子供たちのグループが村の家々を門付けして歩く、というものである。この儀礼はクロアチア以西のバルカン半島に知られているがスロヴェニアには知られていない〔伊東 一九八〇〕。娘たちはこの儀礼の飾りを取り外して持って帰り、呪術的な用途に用いる。またケルンテン（コロシカ）では聖ゲオルギオスに見立てた若者を藁で覆い「墓」に寝かせた後で起こす。聖ゲオルギオスは起き上がりラツパを吹き復活を祝う〔Kuret 1998 : 262〕

以上のクロアチアとスロヴェニアの儀礼「緑のゲオルギオス」は様々な要素を内包している。ガヴァツツイの指摘するように、それは冬を駆逐し、春を告知する機能を持ち、豊穣を予祝する。さらにはスロヴェニアでは降雨儀礼の要素や、春送りと夏迎えをゲオルギオスの死と復活に重ね合わせる象徴表現も見られた。

近隣諸国の聖ゲオルギオス祭の習俗で関連が推測されるものに、オーストリア・ケルンテン州に見いだされる「緑のゲオルギオスの埋葬」がある。これは緑の着物を着た「ゲオルグ」を追いかけて殺し埋葬するという遊戯的儀礼である。

また聖ゲオルギオス祭ではないが、近接した五月一日の祝日や精霊降臨祭の儀礼にも「緑のゲオルギオス」に類似したものが見いだせる。例えばイタリアで五月一日に行なわれるMajo「五月」の儀礼には、「緑のゲオルギオス」と同じような緑の枝で覆われた若者の仮装が見られるし、北バイエルン州の精霊降臨祭に見いだされるプフィングストルの儀礼にも同じような緑の枝と葉による若者の仮装が見られる。

これらの事実は、クロアチア人とスロヴェニア人の民族形成が、バルカン半島に比較的遅く南下したスラヴ人のグループによってなされたことを考えると、この地域の先住民であったゲルマン系あるいはラテン系民族との接触・同化がこれらのスラヴ系民族に著しい影響を与えたことを改めて推測させる。

もとより四月末という共通の日付けがこの時期に相互に類似した儀礼を独立して生みだす可能性も否定できない。イングラント南部で五月一日に行なわれていた儀礼“Jack in the Green”などもこのような視点からの類型論的比較の対象となるだろう。本稿はヨーロッパ民間層における聖ゲオルギオス像の探求のためのささやかな覚書である。

#### 参考文献

- Аверинцев, С. С. 1980. Георгий победил. Мифы народа мира I. Москва: “Советская энциклопедия”: 273-275
- Артхкина, Т. А. 2002. Мифологические основы славянского народного календаря. Весенне-летний цикл. Москва: “Индрик”.
- Fučič, B. 1962. Sveti Juraj i Zeleni Juraj. Zbornik za narodni život i običaje. 40.

129-150

- Gavazzi, M. 1988, *Godina dana Hrvatskih narodnih običaja*. Zagreb: Kulturno-prosvjetni sabor Hrvatske.
- Huzjak 1957, *Zeleni Juraj* (Publikacije Etnološkoga seminara Filozofskoga fakulteta Sveučilišta u Zagrebu) Zagreb: Izdavački zavod Jugoslovenske akademije znanosti i umjetnosti.
- 伊東一郎 一九八〇「バルカンにおける降雨儀礼と儀礼歌」『下田あさひはべルータ』『季刊人類学』十二巻1号「五九〜一〇三」
- 一九八〇「スロヴ人における人狼信仰」『国立民族学博物館研究報告』六巻四号「七六七〜七九六」
- 一九九四「スロヴ民衆世界における聖ケオルギウス」イコン・儀礼・フォークロア」『聖心女子大学キリスト教研究所編』東欧・口

文明の回廊』春秋社「九七〜一二三」

- Колева, Т. 1981, *Гръзлов ден у южните славяни*. София: Издателство на Българската Академия на науките.
- Kuret, N. 1998, *Praznično leto Slovencev*. 1. Ljubljana: "Družina".
- Капуба, М. С. 1977, *Народна Югославија. Календарне обичаји и обреди в страних зэрубежной Европи. Весенние праздники*. Москва: "Наука". 243-273
- Štekelj, K. 1904-1907, *Slovenske narodne pesmi*. zvezek 3. Ljubljana: Slovenska Matca.
- Толстой, Н. И. 1995, *Славянские древности*. 1. Москва: Международные отношения: 496-498